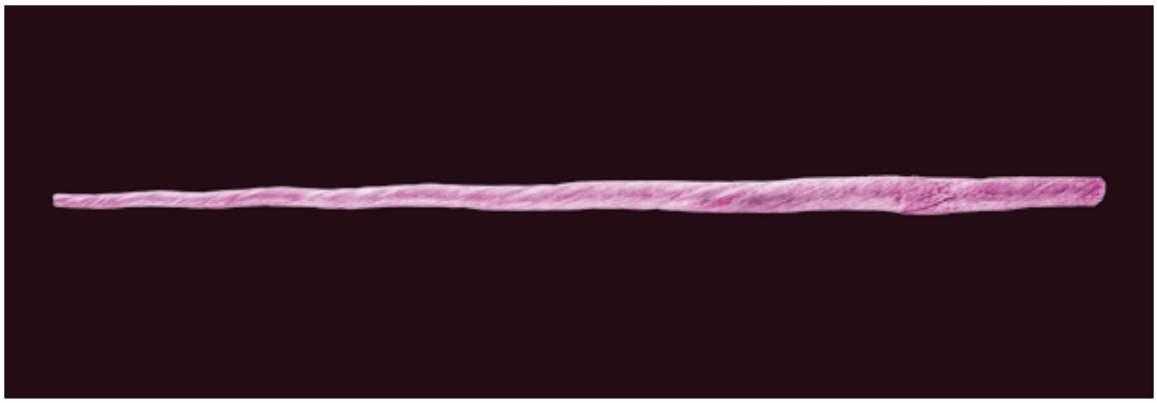
ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.141



HA186　イッカクの牙（きば）　エスキモー／グリーンランド
長さ196 cm　1990年収集　撮影：城野誠治

イッカク（*Monodon monoceros*）の牙。イッカクは北極海を中心とした高緯度海域に生息する比較的小型のクジラである。角のようにみえる部分は実は牙であり、左右共に生える。ただし、右側の牙は小さく埋もれており、左側の牙だけが皮膚を突き破って左巻きに伸びてくる。牙が伸びるのは基本的にオスで、最長3メートル程度まで成長する。ごくまれに左右両方の牙が伸びる個体もいるが、この場合、牙はどちらも左巻きである。

現在、イッカクはワシントン条約で保護されているため、博物館展示や研究用途を除いて牙の入手は困難だが、かつてはイッカクの牙を使った工芸品が日本にも輸入されていた。グリーンランドやカナダでは現在でも先住民に限って個体数を管理した上での捕獲が認められており、グリーンランドの場合、年間500頭前後が捕獲されている。イッカクの皮は「マッタ」と呼ばれ食用に珍重されるほか、肉やレバーも食される。

目次　Contents

1　表紙　イッカクの牙
2　講座「北海道の骨角器」
　／講習会「ひも織り」
3　館長講座「オホーツク海沿岸諸民族の交流 PART2」
　／講座「オホーツク文化の金の刀」
4　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

講座

北海道の骨角器

2026.3.8（日） 10:00-11:30

講師：福井　淳一氏

（公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター 主査）

北海道各地で30年にわたって遺跡調査に従事してきた講師を招き、おもに道内で発掘された骨角器について、多様な側面から紹介していただきました。

最初に、骨角器の概要について説明していただきました。骨角器とは、骨、角、歯や牙、貝殻など、リン酸カルシウムあるいは炭酸カルシウムが主成分の動物性の材料から作られる道具です。骨角器は、骨や角の形や丈夫さ、光沢を活かし、木や皮など他の素材と組み合わせて、狩猟具や漁具、工具、装飾品などとして利用されてきました。

次に、北海道の骨角器について紹介していただきました。道内では、333の遺跡から約5万6,000点の骨角器が確認されています。多様な骨角器が知られていますが、地域や時期によってその出土数や種類には違いがあります。全体としてもっとも多いのは貝製の玉で、オホーツク文化期には銛先（もり）や釣針、鏃（やじり）などが多くなっています。

さらに、オホーツク文化の骨角器について詳しく解説していただきました。オホーツク文化期には、縄文・続縄文文化期よりも骨角器の種類が減りますが、これは鉄製品や木製品に置き換わったためと考えられます。一方で、銛先、釣針、掘り具などは逆に多様化し、さらに針入れや装身具なども発達しました。特に銛先は多様な形に発展しますが、これはオットセイ、アザラシ類、イルカ類など、地域ごとに異なるさまざまな獲物に対応したためと思われます。

最後に、講師が最近関心を持っている骨製のサイコロについて紹介していただきました。骨製のサイコロは日本全国で確認されており、目のなかに鉛を仕込むなど、いかさま用と思われるものもあるそうです。講師は、こうした点に当時の人の「人間らしさ」が感じられて興味深いと話しておられました。　（学芸グループ　中田篤）

福井 淳一 講師

講習会

ひも織り

2026.3.13（金） 9:30-12:30

講師：高木　たまき氏（織り紐（ひも）研究家）

織り紐（ひも）研究家の高木たまき氏を講師としてお招きし、北欧3国（ノルウェー、スウェーデン、フィンランド）北部からロシア北西部にかけて暮らす少数民族サミの織り紐を作る講習会を開催しました。高木氏は日本で数少ない織り紐を専門とする研究者であり、国宝の経典（巻物）を縛る紐の復元作業などに携わってきました。

講習会は、まずサミの織り紐に関する基礎知識を学ぶ座学から始まりました。私たちが普段目にする紐やロープの多くは撚（よ）り紐か組み紐ですが、織り紐はそれらと異なり、経（たて）糸と緯（よこ）糸からなる織られた平たい紐です。サミの織り紐は腰ベルトや揺りかごの固定、雪が入らないようにブーツの足首を縛る用途などに使われてきました。

織り紐の基礎について学んだ後、いよいよ紐づくりに移りました。綜絖（そうこう）に通された経糸の一方の端を机に、もう一方の端を織り手の体に固定し、ピンと張った経糸の列に杼（ひ）（シャトル）を使って緯糸を通していきます。今回、杼はプラスチック製のものを使用しましたが、サミが紐織りに使う伝統的な杼はトナカイ角製のもので、刃が湾曲したナイフのような特徴的な形をしています。紐づくりに使う赤、青、黄、緑の毛糸は、スウェーデンにおけるサミ文化の中心地ヨックモック直送のものを使用しました。ちなみに、この4色はサミ文化を象徴する色でもあります。

綜絖を上下させながら紐を織る作業は、初めての人にはなかなか難しいものです。ですが、最初苦戦していた方々も、手を動かしながら徐々に織りを体で覚えていったようでした。最終的には、参加した全員が織り紐を完成させ、各々キーホルダーなどに仕上げました。

今年度は10月4日（日）にスーザン・フォルケス氏（織り文化研究家）を招き、講座「北ヨーロッパの織り紐のはなし」を開催します。関心のある方はぜひご参加ください。

（学芸グループ　佐藤重吾）

紐（ひも）織りを実演する高木たまき氏

館長講座

オホーツク海沿岸諸民族の交流 PART2

―違うのに似ているコリヤーク語とニブフ語の不思議な関係―

2026.4.25（土） 10:00-11:30

講師：呉人　惠（当館館長）

本講座では、「オホーツク海沿岸諸民族の交流PART2」と題し、昨年に引き続いて、一説ではオホーツク文化の担い手であるとされるニブフと、古コリヤーク文化の子孫とされるコリヤークの言語の関係に注目しました。

ニブフ語（孤立言語）とコリヤーク語（チュクチ・カムチャツカ語族）はいずれも古アジア諸語というグループに分類される言語です（ケット語、ユカギール語、エスキモー･アリュート語族も含む）。チュルク系のサハ語やツングース系諸言語が進出してくる以前から、北アジアに分布していた言語の集まりです。従来、系統的な関係もなければ、類型的な隔たりも大きいとされてきました。

一方で、近年、古アジア諸語間あるいは他言語との関係が見直されてきました。特に、①ケット語とナデネ語族、②ユカギール語とエスキモー・アリュート語族とウラル語族、③チュクチ・カムチャツカ語族とニブフ語の間にそれぞれ系統関係の可能性を示唆する研究が注目されます。

本講座では、フォーテスキュー（M.Fortescue）が主張する③を取り上げ、主張の根拠の一つ、奪格／場所格の兼務について検証しました（Fortescue 2011）（奪格は日本語では格助詞「から」、場所格は「に」「で」に相当）。

フォーテスキューは、同系性の証拠として、音韻対応と周辺諸言語には見られない特異な現象の共有を挙げています。ニブフ語にもコリヤーク語をはじめ、チュクチ・カムチャツカ語族にも奪格／場所格を兼務する形式があることは後者の一例です。しかし、この現象は朝鮮語やチュルク系諸語にも見られ、必ずしも特異な現象とは言えず、同系性の証拠にはなりえません。たしかに両言語には外見上の違いにもかかわらず、共通点もあります。それが一体何によるものか、今後きめ細かな検証が求められます。このことを指摘して、本講座を締めくくりました。言語学的に少々込み入ったテーマでしたが、参加者の皆さんは大変熱心に耳を傾けてくださっていました。　（館長　呉人惠）

呉人館長による講座の様子

講座

オホーツク文化の金の刀

2026.5.16（土） 15:00-16:30

講師：高畠　孝宗氏（オホーツクミュージアムえさし館長）

文化庁の令和7年度「Innovate MUSEUM事業」において、当館は中核館として北海道枝幸町のオホーツクミュージアムえさし所蔵資料50点のデジタル化を実施しました。その中には、オホーツク文化に関する刀も含まれていました。そこで、オホーツク文化について長年研究を続けている、オホーツクミュージアムえさしの高畠孝宗館長を講師に迎え、最新の研究成果についてお話しいただきました。オホーツク文化は、5、6世紀頃から11世紀頃にかけて、主にオホーツク海沿岸地域で栄えた文化です。網走市内ではモヨロ貝塚がオホーツク文化の代表的な遺跡であり、枝幸町では目梨泊（めなしどまり）遺跡が知られています。

遺跡からは土器や石器、骨角器などの生活道具が出土するほか、墓からは副葬品として青銅製品や鉄製品が発見されています。これらの金属製品は交易によってもたらされたものと考えられており、オホーツク文化の人々が広範な交流を行っていたことを示しています。

これまでの研究から、オホーツク文化の刀の出土は、目梨泊遺跡とモヨロ貝塚の二つの遺跡に集中していることが分かってきました。他の遺跡で未発見である可能性もありますが、これまでの発掘調査の成果からは、この二つの遺跡がオホーツク文化の中でも特別な役割を担っていた可能性が指摘されています。

ところで、オホーツクミュージアムえさしがある宗谷管内では、高校卒業後に約7割の生徒が地域を離れています。こうした状況の中で、「博物館は地域のために何ができるのか」という問いから、郷土への理解を深める機会を提供するため、枝幸高校で郷土研究部を復活させる取り組みが始まりました。この活動の中で発掘されたのが、後に「金銅装直刀」と名付けられることになる刀です。現在、この刀については詳細な分析が進められています。今後は刀の製作背景や流通経路、社会における役割などを検討し、オホーツク文化の実像解明につなげていくことが紹介されました。　（学芸グループ　笹倉いる美）

高畠 孝宗 講師

第41回特別展「海獣が支える極北のくらし
ーカヤックからアクセサリーまで」

北方地域、特に樹木がほとんど育たないツンドラを中心とした高緯度地方においては、かつて生活に必要なあらゆる物をアザラシやセイウチなどの海棲哺乳類から作っていました。食糧から衣服、狩猟道具やカヤック、アクセサリーに至るまで、海棲哺乳類の皮や骨、牙などで作られた様々な資料と、海棲哺乳類がモチーフになった壁掛けなどの工芸品を紹介します。

会期：令和8年（2026年）7月18日（土）～10月18日（日）
会期中の休館日：10月5日（月）、13日（火）
会場：北海道立北方民族博物館・特別展示室
観覧料：一般450円、65歳以上300円、高大生200円
（常設展とのセット 一般800円、65歳以上300円、高大生320円、7月～8月は高校生のみ200円）

ホッキョクグマとワモンアザラシの毛皮製ズボン

関連事業：

特別展解説講座
日時：2026年7月18日（土）10:00～11:30
解説：日下　稜（当館学芸員）

特別展関連講演会「オホーツク海におけるアザラシ猟と、極北のくらしに不可欠な海棲哺乳類の生態」
日時：2026年7月26日（日）10:00～11:30
講師：内藤靖彦氏（国立極地研究所名誉教授）
三谷曜子氏（京都大学野生動物研究センター教授）

上映会「北方民族博物館シアター秋」
日時：2026年8月22日（土）10:00～11:30
解説：日下　稜（当館学芸員）

講座「チュクチの海獣狩猟」
日時：2026年8月29日（土）10:00～11:30
講師：池谷和信氏（国立民族学博物館名誉教授）

講座「北海道博物館紀行　士別市立博物館」
日時：2026年9月5日（土）10:00～11:30
講師：中村圭佑氏（士別市立博物館学芸員）

INFORMATION

行事報告

イベントなど

◆ 4月25日（土）～5月17日（日）、ロビー展「Innovate MUSEUM事業成果写真展―文化財写真の可能性」を開催しました。本展では、オホーツクミュージアムえさし、釧路市立美術館、士別市立博物館、東京大学大学院人文社会系研究科付属北海文化研究常呂実習施設・常呂資料陳列館が所蔵する民族・考古資料や絵画、写真原板などを、高精細デジタル画像にするプロジェクトの成果の一部を、写真展として紹介したものです。

展示会場の様子

◆ 5月3日（日・祝）～5日（火・祝）にかけてゴールデンウィークイベントが開催されました。毎年恒例となっている参加無料のものづくりコーナーでは「革のキーホルダーづくり」と「革フレームのミラーづくり」を実施しました。どちらもたくさんの方に参加いただき、盛況のうちに幕を閉じました。

いい思い出になったかな？

◆ 5月17日（日）、文化財写真の専門家である城野誠治氏（合同会社 文化財イメージング、当館研究協力員）を講師として招き、「文化財写真研修会」を実施しました。撮影する際に重要なライティングの技術など、文化財写真のいろはを学びました。

非常に実践的な研修会でした

はくぶつかんクラブ

◆ 4月18日（土）、はくぶつかんクラブ「まが玉づくり」（講師：小西智恵解説員）を開催しました。

◆ 5月23日（土）、はくぶつかんクラブ「フェルト動物とフェルトボールでつくるサンキャッチャー」（講師：石原生久代解説員）を開催しました。

上手にできました！

北方民族博物館だより
No.141
令和8年（2026年）6月19日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
https://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会